

評 選 門 部 説 小

選 評

坂 上 弘

今年のやまなし文学賞受賞作「梵字碑にザリガニ」は、力のこもった作だ。ここに出てくるガクト君という小学生の息子は、不思議な少年である。将棋教室の先生のもとでどんな上達、父親が自らの職場である大学の図書館から借りてくる外国の小説や司馬遼太郎の名著を難なく読破する。好きなテレビの番組とひとりで対話している。好きなこの息子の姿にほほえみながらも心配している両親。学校では模範的な生徒ですと評価されている。父母はこうした息子の、医師から自閉症と言われる症状に必死に対峙している。この小説のよさは父親も母親もしっかりしているところだ。息子を見つめる悲願のかたちがみえていて、引受けていることだ。そういう「衝動」を、作者は沖繩の自然に託して描いている。

インドから沖繩へと渡ってきた梵字碑めぐりや、少年がザリガニに夢中になる絵がうつくしい。梵字碑の研究にガクト少年がのめりこむのを心配する近隣の老女の心は、少年の母親とも共通するものだろう。なにか、次世代のはじまりのような緊迫感がある。

佳作「鷹を飼う」は、海外での単身赴任で結婚生活の半分を過ごし、定年退職した後離婚、山間で新たな孤独な人生の一步を踏み出すという主人公の「創り方」が強引だが、その孤島に等しい家に棲みつく鷹との交流が始まる。いかなる人間の行為にも時間にも虚無はなく、意味がある、という夢を語る。

もう一つの佳作「スーパームーン」は、老人ホームが舞台で孤独死に向き合うテーマだが、暗くはない。窓の外、天空の大きな月がその澄んだ光で包みかけてくれるのを、主人公はわが身を包まれるように見るのである。

感 想

佐 伯 一 麦

受賞作「梵字碑にザリガニ」は、防音イヤーマフで音を遮断して将棋を指すような息子を一員とした若い家族の姿を、父親である「彼の」視点から描いて、独特なリアリティを感じさせる作品である。題名に取られた梵字碑を採す中でザリガニを釣るあたりから、俄然惹き込まれ、若い世代によって捉えられた沖繩の風土、暮らしがよよく伝わってきた。ツルムラサキが、自分からフェンスに蔓をかけるわけではなく、風が吹かれてフェンスにかかるのを辛抱強く待っている。息子に重ねる「彼の」述懐には切実な実感があり、最後にザリガニを水槽から逃がせてあげると「ゆう久の息子」の成長をこちらも見守りたい思いとなった。

佳作の「鷹を飼う」の、黄褐色の目を瞬きもせずに、私を射抜くように見据え、艶やかな嘴は鍵状に曲がり、先端は鋼の刃のように鋭く尖っている。猛禽である鷹を描いた文章力は候補作中随一と感ぜられた。妻との離婚を反省し、違法であることを承知で鷹と共棲しようとする主人公の心情がフェアネスで、淡い希望で終わるラストも読後感がよかった。同じく佳作の「スーパームーン」は、ややリアリティに難があったものの、独特の説得のさせ方を持った魅力ある作品だった。郵便ポストからヘアカンベエするように垂れ下がって「る」チラシなど、細部が活きた。すべてを割り切らずに、解釈に余りを残すことも作の、ひいては人生の余韻にもつながるのでないだろうか。以上三作の差は僅かだった。

選 評

長 野 ま ゆ み

受賞作は「梵字碑にザリガニ」ときまっていた。梵字碑とはサンスクリット語を起源とする文字が刻まれた石碑で、十七世紀ごろのものといわれる。沖繩の各地に残る。野の石と化しているものもある。小学校に通わなくなった息子がこの石碑に興味を持ったことから、一緒に探してみようと誘う父親。その途中で見つけた泥池にザリガニがいた。主題は息子の心の成長と、悩みつつ誠実にサポートする若い父の姿だが、もはやどんな土地で生まれ育っても、新興住宅地で暮らす子育て世代にとって自然は遠いものであり、近隣の年長者たちとも断絶している、そんな現実が静かに示される佳品と思った。

佳作の「鷹を飼う」は定年を迎えた主人公が、会社員時代のまま一家の長として退職後の「山暮らし」を提案するも妻は従わず、離婚する。もとより息子たちとは連絡すらない様子。鷹という先住者がいる家でのひとり暮らしが始まる。望まずに単身となった男と、もともと単独で生きることが自然である鷹との奇妙な暮らしぶりを巧みな筆致で描く。

もうひとつの佳作は「スーパームーン」。やむなく「人が死んだ」部屋で暮らすことになった若い主人公は心身ともに細い月のように頼りないが、高齢者施設の夜間勤務を通じて、そこで知りあった老婦人との交流を重ねるうち、いつしか励ます側となってゆく。老婦人とスーパームーンを眺める場面への着地が印象に残った。